

「平和の道」

ルカによる福音書 19章 37-40節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、クリスマス前にも読みましたルカ 19章で、世の終わりに平和の王として来られる主イエスのことをもう少し学びたいと思います。

地球上では相変わらず紛争や内戦があちこちで勃発していて、世界平和の気配は一向に見えないのですが、今日の重要なテーマは、この「地上の平和」というものが実は「天の平和」と深く結び付いているということにあります。「天の平和」とは神の御許にある平和、すなわち主イエスとその十字架上の死と復活によって、人間の罪（ハマルティア）により敵対関係にあった、神と私たちの間に打ち立ててくださった、平和のことです。

それでは、「地上の平和」とはどのようなものでしょう。聖書は、地上の平和とは天に於ける平和が地上に映されて成っているもので、その天の平和を地上に映して行くことが＜平和の道＞であると教えています。従って、ただ単にこの地上の対立の状況だけを見て方策を練り、実行に移しても、＜平和の道＞を歩むことは出来ないのです。つまり、神が主イエスによって実現してくださっている「天の平和」を、まずその身に受けなければ、地上に平和をつくり出すものとなることなど、あり得ないと言っています。地上に実現される平和は「天の平和」の一部を映し出した影であり、本物の平和ではないからです。

しかし主イエスが平和の王として再度来られる時には、本物の平和が実現され、影は消え去ります。でも、それまでは「地上の平和」は「天の平和」の影に過ぎないわけですから、私たちがどれ程努力しても、地上からの争いはなくなり、またそれは家庭内など身近なところに於いても同じことが言えるのです。

このように聖書は冷徹に人間世界の現実を見せながら、それと同時に、「地上の平和」が「天の平和」の影に過ぎないことをくわきまえている。人々には、「天の平和」を少しでも大きくはっきりと地上に映し出す努力をすることが出来るということも教えています。「地上の平和」はいつも不完全で、努力をしても無になることが多いのですが、しかしその中で私たちは、失望することなく「天の平和」の影を増やして行くことに力の限りを尽くすことが出来るというのです。ですから、聖書は、平和の王としての主イエスの再臨の＜希望（エルピス）＞によって支えられている者である私たちであるゆえに、厳しい現実の中でも忍耐し、平和を築くための努力を尽くしていくことが、私たちの歩むべき＜平和への道＞であると語っているのです。

また今日の聖書には「イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇蹟のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。『主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光。』」（ルカ 19：37・38）とあって、主のエルサレム到来を、御子誕生の時の天の軍勢と同じ賛美で迎えた主の弟子たちの姿を、平和への道をわきまえていた人々と評価しています。

しかし一方、そんな主イエス一行を平和の道をわきまえずに敵視するエルサレムの人々をみて・・・主はそんなエルサレム（平和の意）の都のために泣かれたと、聖書は伝えています。否、この時、主イエスは涙されるだけではなく、自分を拒む人々の罪をも背負って御自分の肉を裂き、血を流して、天の平和を地上に実現しようとされていたのです。というのも、この出来事の後、弟子たちは聖餐に与るのです・・・。つまり私たちも、弟子たちと共に、聖餐に与るたびに、神と私たちの間に平和が実現したのは主イエスの十字架の死によってであったことを思いだし、主イエスの再臨によって「天の平和」が地上に完成するという＜希望＞を新しくして、「天の平和」を映し出す＜平和の道＞を歩んで行く勇気をいただくからであります。主イエスの到来を覚えて、高らかに賛美しながら平和への道を指し示して行く、それが私たちに託された使命です。

今日の聖書の最後の「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す。」（同 19：40）との主イエスの言葉は、まさに主の私たちへの期待の表れです。この主の期待に応じて真の平和の王である主イエス・キリストが来られることをわきまえ、そこに確かな希望があることを覚えて、争いの絶えないこの世界に平和を作り出す努力を続けて行く・・・、高らかな賛美と共に。それがキリスト者の、教会の存在の意味であり、意義であるのです。

（説教要約 羽入田悦子）